



▶ 学年 中学校 第3学年

▶ 単元 考えたことを伝え合おう「高瀬舟」

POINT
01

対話的な学びを引き出す教師の仕掛け

「高瀬舟」は、役人の庄兵衛が、弟殺しの罪で島流しの刑を受けた喜助を高瀬舟に乗せて護送する中で展開する物語である。

本単元は、文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間について自分の意見をもつことをねらいとしている。初発の感想で、生徒たちは喜助と庄兵衛の満足に対する価値観に共感したり疑問に思ったりして読んでいたことが分かった。そこで、本時において教師は「満足し、幸せに生きるために、十分なお金は必要か」と問うことで、一人一人が自分の考えをもち、主体的に話し合いをすることができるようにし、本単元のねらいに迫りたいと考えた。以下は、小グループで自分の考えを話し合うことを通して、人の生き方（満足し、幸せに生きること）についての自分の意見をさらに広げたり深めたりする場面である。

POINT
02

対話的な学びの様子

◎ 自分の考えを話す。

生徒A「私は、幸せな生き方には十分なお金が必要だと思うんだ。**衣食住にお金が必要で、喜助の持金の二百文では十分に暮らせないと思うから、喜助は幸せになれないと思う。**」

生徒B「庄兵衛は自分の暮らしに『満足を感じたことはほとんどない』と考えていて、**幸せだと感じていないということだから、お金は少なくとも今の状況に満足している喜助の方が幸せだと思うんだよね。**」

生徒C「ぼくもBさんと同じ意見なんだけど、喜助と庄兵衛ではお金の価値基準が違うんだよね。**喜助の方が満足するのに必要なお金の基準が低いから、喜助のように考えれば、お金が少なくとも幸せだと思うんだよ。**」

◎ 論点を整理し、自分の考えを広げたり深めたりする。

教師「3人とも、『満足』という視点は共通していますね。お互いの意見を聞いて、気付いたことや考えたことはありますか。」

生徒B「喜助と庄兵衛では満足する基準が違うんだね。二人の満足の考え方について、もう少し話し合いたいな。」

生徒C「喜助の満足は『口を糊することのできるだけで満足』ということからも、例えばマイナスだったものが、0になって、その0を満足だと感じていると言えるね。」

生徒A「その考え方で言うと、庄兵衛は『たいてい出納があっている』のに『そこに満足を感じたことはほとんどない』ということだから、もともと0だったところに満足できなくて、それ以上を望んでいる。0からプラスになって満足なんだね。」

教師「二人の話していることは、Bさんに伝わったかな？」

生徒B「図に表すと、こうなるね。(図)庄兵衛の満足は、きりがな

生徒A「**幸せは、お金が全てではないということだね。わずかなお金でも、満足して幸せだと感じるかどうかは、その人の考え方次第だということがあったよ。**」

—『授業者の視点』—L、M

(相双教育アピールより)

生徒らが小グループで交流する際も、教師は対話の様子から、言葉による見方・考え方を見取る。その上で、対話を見守ったり考えの根拠やその妥当性を問い返したりすることにより、生徒の思考が広がっていく。

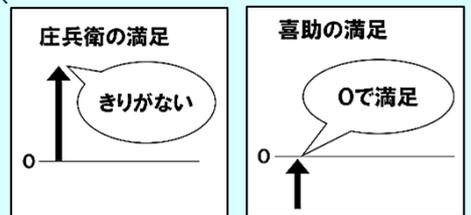


図 庄兵衛の満足のイメージと喜助の満足のイメージ

POINT
03

学びが深まった生徒の姿

教師が、下線部のように対話の中で互いの考えの共通の視点を明確にしたり、対話の内容が共有されているかを確認したりしたことで、生徒は互いの考えのよさを明らかにすることができた。そのため「十分なお金がないと、幸せに生きることはできないのではないか」と考えていた生徒Aも、生徒BやCの考えを取り入れ「**幸せだと感じるかどうかは、その人の考え方次第だ**」と、自分の考えを広げたり深めたりすることができた。